

その一、ボケとカワイコちゃんの巻

※この章の目的 → 被写界深度(ひじやかりんぞ)の理解

熊さん

「ちわー、御隠居。居るかい？。おーい、御隠居。隠居やーい……。隠居やーい……。……じれってえな。……居るのか居ねえのかはつきりしちってんだ。この古狸い……」。

御隠居

「……やれやれ、熊さんか……。毎度のこつたが、雷みてえな野郎だな……。……あたしが出ていくまで、ちよいとの間待てねえのから……」。

熊さん

「おっ、フツフツ言いつながら出て来やがったな、居るんならよろしい」。

御隠居

「何がよろしいだ。で……。金でもけえしに来たか」。

熊さん

「借金も財産のうちってな、誰がけえすもんか。もってえねえ」。

御隠居

「なんてえ奴だね、この男は……。そんで……」。

熊さん

「おう、今日来てやったのはな、ちよいと御隠居に聞いてやりてえことがあつてな……」。

御隠居

「聞いてやりてえ？、それが人様から、ものを教えて載く態度かい。全く……。で、何だい」。

熊さん

「へっへっへ……。てのはな、実は……。これよ。ちよいと見とくれ」。

御隠居

「なんだ、撮影会の写真じゃねえか。一応写ってる……。いつてえ、何が聞きてえんだい……」。

熊さん

「それがな……。この写真なんだけど……。雑誌とか見るとバックがきれいにぼけて、カワイコちゃんだけが浮き上がったように写ってんだろ。ところがあつしの写真ときたら、バックがゴチャゴチャして、せっかくのカワイコちゃんがでえなしになつちまってる。やっぱしカメラが悪イのかねえ？。どうしたら、あんなふう撮れんだろうねえ。そこんところを聞きてえと思つて、ちよっくら、シラフ出さしてもらったんだ」。

御隠居

「ああ、そうかい。それならそうと、早く言ひな……」。

「……へへえ、なるほどねえ。……で、確か、おめエさんのカメラは、親父の使っていた一眼レフだったよな。なら、カメラにやあ一切問題ねえ。問題なのは、おめエさんの使いこなしの方だ」。